

笹沼俊暁

『流転するアジアのささやき——現代日本列島作家は如何に台湾、中国大陸を書いたか』

笹沼俊暁『流轉的亞洲細語…當代日本列島作家如何書寫台灣、中國大陸』

丸川哲史



游撃文化、2020年

著者、笹沼俊暁は一九七四年生まれ、日本文学を専攻し、国内でも成果を上げて来た研究者であるが、近年では台湾の大学で日本文学を教えるポジションを活用しながら、本書（中国語文）を書き上げた。私も似た経歴を持つ人間として——日本文学で修士号取得後、一九九〇年～九三年台湾にて日本語教師、その後台湾文学研究、中国文学研究を志す——興味深く本書を拝読し、このような研究者が出て来たことに大いなる希望を感じた。本書評の進め方としては、まず本書のメリットを紹介し、その上で、私の観点から補充していくこととする。いわば同志的存在とも言える同氏とともに、今のアジアの中で生きること、なかでも東アジアの中で人文研究者として生きることの喜びと苦しみの核心部分を掴みだしてみたい。

さて本書、そして著者の立ち位置を大雑把に紹介してみたい。前提となるのは、日台／台日の間で、一九九〇年代以降に広がった台湾独立運動系統の一部と日本の右翼文化人が合流し、日本の植民地統治の歴史について賛美するような文化的キャンペーンが出て来たこと——まず、これについて危機意識が持たれている。そして、そういった文化的キャンペーンの成立が何を契機にして成立したものであるのかについて、学問及び文学評論の立場からの脱構築を試みること——一応、このようなまとめ方が可能かと思う。このように概括するのは、本書が取り上げる対象として、司馬遼太郎が九〇年代前半、李登輝と対談したことを一つの契機として植民地台湾の経験とその痕跡を紹介した事績に注意を傾けていることが挙げられる。ここで告白すれば、私の問題意識の発

生とまさに軌を一にするところがあるのである。

さて、本書は、上に記した司馬遼太郎も含め、丸谷才一、邱永漢、陳舜臣、船戸与一、津島佑子、リービ英雄、温又柔など、世界的に多岐にわたる作家を扱っているが、笹沼の視野はさらに歴史・地政的な広がりも見せている。例えば、沖縄文学を起点として「日本」の自明性にメスを入れるような試み、また論述の所々に朝鮮・韓国文学にかかわる知見を参照枠として取り入れていることなど、(現代中国文学に関する言及の少なさはあるものの)九〇年代以降に発展したところの、日本文学研究の土台に対するアジア的視点からの再検討という課題に真摯に応えようとしている。

その上で、本書が最も問題にしているのは、結果として日本社会は、植民地台湾へのノスタルジーを温存して来てしまったという点、その原因でも結果でもあるところで、民主化が進んだ後の時代において「観光客」として訪れた二度目の台湾との出会いがあり、畢竟、いわゆる冷戦期台湾の捉え方が甘くなっている、という日本側の脈絡である。ここで、日本人一般が台湾認識において軽視して来たモメントを挙げるなら、それは笹沼が言うように「戦後」、「冷戦」、「中国」、「米国」、そして「外省人」(一九四五年以降に大陸中国から移り住んできた人々を指す)ということになる。それらのキーワードは翻って、戦後日本における日本人の自意識が排除して来たものでもある。なかでも、「冷戦」こそ最も重要な

キーワードとなるはずであるが、それは現在との対応関係として過ぎ去ったものとも言えないところが、まさに今日の台湾を捉える難しさであろう。台湾と大陸中国との関係は、元より国民党が統治する台湾と大陸中国を統治する共産党との対立としてあったものの発展形であり、九〇年代後半からは、さらに「台頭する中国」に直面する台湾の人々の政治的選択の困難さとして立ち現れているものでもある。形容すれば、グローバル化の中で大陸中国との経済的関係の接近が為される一方、しかし政治的には主に米国の動きも介在して「新冷戦」という呼び名も使われるなどの厳しい状況が続いている。そういつた昨今の状況に分け入る上でも、前期冷戦とも呼べる一九四〇年代後半から一九八〇年代までの四十年ほどの時期の台湾について考える必要がある——このことを著者は何度も訴えかけるのである。すなわち先に述べたように、日本社会一般の植民地台湾へのノスタルジーはまさに、戦後における過酷な、日本のそれとも違う台湾的「冷戦」への無理解から来るもので、翻ってそれは、日本人そのものがいまだ「冷戦」そのものから抜け出していないことの証左でもあるということだ。

その意味からも、戦後(冷戦期)台湾における家族の記憶を元手にして執筆活動が続けている温又柔や、また幼少期に台湾に住み、米国政府や国民党政権との関係を濃厚な記憶として担保し、

その記憶を手放さないリービ英雄の論述を重視することは、本書が孕む必然性そのものであろうとも思われる。さらにそのリービがむしろ大陸中国（とりわけ現代中国の農村部での展開）へとその関心領域を広げていることは、極めて貴重でありかつ、チャレンジなことであると認め得るし、この部分について笹沼が関心を示しているところにこそ、まさに本書の特質が現れている。

以上のことを踏まえ、私が受けとめたところの、本書の最も卓越した部分として、津島佑子の労作『あまりに野蛮な』への読解がある。ざつくりと内容を紹介すると、それは、日本植民地統治時代に台湾に植民した日本女性が間接的に霧社事件（一九三〇年に起きた台湾の山地先住民の総督府統治への蜂起事件）を経験したことから、「現在」を生きる女性主人公が台湾の山地先住民地区を訪れ、精神の解離状態に陥った事績とが、前者女性の遺した手紙によって結び付けられるというストーリーである。そこで笹沼は、『あまりに野蛮な』に対し、日本植民地統治の不合理と植民者として生きることの不安が、ジェンダーの観点から、批判的・抵抗的に語られている点を評価しつつも、別のアプローチからの批判を企図するのである。それは、この二人の主人公を繋ぐ植民地言説として、結果的に帝国日本の「南進政策」に掉さした柳田国男の「海上の道」に象徴される文脈、つまり日琉同祖とも繋がってしまう南方幻想が活用されていることを指し示したのである。そしてま

た笹沼は、このような南方幻想というものの、植民地期への潜在的ノスタルジーが温存されたのも、そもそも二人の主人公の間に横たわる戦後台湾の「冷戦」への把握の足りなさによるもの、と結論づけるのである。この部分はまさに、研究者でなければ突き止められない読解であり、その展開であると言える。この指摘に関して、書評者は、学問の力というもののまだ有効なことを確認し、希望を感じた次第である。

その上で最後に補充したい観点は、著者も含めて台湾を語る際に、「中国」、あるいは「大陸中国」というカテゴリーを扱うことの困難さである。つまり、ここで書評者が言いたいのは、「中国」の前に「現代」をつける「現代中国」の意義とその歴史性についての検討である。これは本書において必ずしも明示されていないものの、実は展開されている論点でもある。その前提として、一般的に日本社会においてまず「古い中国」への愛着として残存するものがあつたわけであるが、「現代中国」とはまず、「古い中国」を克服するために展開されたものであり、またそれは結果として、「革命」を通じて追及されて来たものである。その反面、日本において中国の「現代性」はどのようなものとして把握されて来たのか。一つのサンプルとしてあるのが、たとえば司馬遼太郎が示したような中国認識である。司馬は近代主義者として、事ある毎に近代化に立ち遅れた「固陋の中国」を批判し続けていたと

言える。しかし、中国内部における「現代中国」とはそのような日本人が抱き得る近代主義的な視野には収まらないものであった。話はやや込み入るが、ここでいう「現代中国」とは、もちろん清末の改革者たちも含むものの、またその後の国民党が目指した「現代中国」、そして共産党が目指した「現代中国」をどう位置付けるか、という問題性において現前して来たものである。冷戦期台湾において最も大きな問題だったのは、この国民党と共産党が競争した「現代中国」の「現代性」をどう評価するかと言う問題であったが、この問題性を豊かにする契機そのものが「冷戦」の暴力によって抑圧されてしまった。要するに、この中国の「現代性」への考察を抑制し、二項対立へと単純化したものこそ「冷戦」の効果であった、ということになる。ここで書評者が言いたいのは、国民党が破れて共産党が勝ったということなどではない。むしろ、今日目前にしている共産党の「現代中国」は、共産党が目指した革命の失敗の上にあるもの、と私などは考えている。もちろん、もう一方の国民党の「現代中国」が成功したわけではないものの、それが何であったのかは今でも十分に考察に値するものであることは言を俟たない。

このような文脈で、書評者は自身が研究者としたかかわった台湾文学について、戦前の台湾文学は、多くの部分として日本統治の内部に組み込まれてしまったものと考える一方、戦後台湾にお

ける台湾文学は、以上で述べた「現代中国」を造ろうとしてそれが失敗、あるいは抑圧されることとなった「冷戦」に内属するものとしてあった、と考察している。その意味で、本書に対する批評として、そういった冷戦期台湾の現実の中で苦しんだ台湾文学の担い手、例えば陳映真などへの言及も必要であったのではないか、と思う次第である。

とは言え、本書が書かれた意義は言い尽くせないほど大きい。日本語に翻訳され、日本で出版されることが望まれる。